

都市農業は日本農業の先駆け

都市農業振興基本法は2015年に施行されているが、10年以上に宅地化すべきものと位置づけられてきた都市農地を半永久的に農地として保全していくため、2000年頃から都市農業の位置づけを見直す法律の必要性を訴え続けてきた経過がある。そして現場に足を運ぶ中で、生産するだけでなく消費者と連携・交流し、地産地消をすすめる都市農業は日本農業がすすむべき方向性を示している実感もしてきた。都市農業は食料の供給や景観等のいわゆる多面的機能に加えて、防災、体験・学習・交流の場の提供、農業に対する理解醸成も含めた多様な機能を持つ。まさに都市農地は物理的・空間的に都市にとって欠かすことのできないものとして市民・消費者の認知は進みつつある。これを反映して体験農園の増加傾向が続く。

農あるまちづくり講座

都市農業は園芸や果樹の比率が

高く、施設型から観光農園、体験農園まで経営形態は多様である。都市農地を維持していくためには経営の確保が条件であり、消費者・市民の支持が欠かせない。

昨年2月に労働者協同組合(ワーカーズコープ)の日本社会連帯機

獲得、そして農業参画がねらいだ。その11回目は「都市農業の実情と農業経営」がテーマで、講師はレイモンドファームの岩崎亮介さん(32)と矢ヶ崎ぶどう園の矢ヶ崎泰幸さん(42)。「質の高い洋服」にこだわる岩崎さんは、この

時流を読む

多様化が進む
都市農業

農的社会デザイン研究所代表 薦谷 栄一

構と川崎平右衛門顕彰会等で都市農業研究会を立ち上げ、その活動の第一弾として、同年9月から「西東京市 農あるまちづくり講座」を開始し、本年2月まで、月2回、12回の講義を開いてきた。消費者・市民が対象で、都市農業への理解

季節、出荷が中心となるニンジンに合わせたのニンジン色の鮮やかなセーター。FM西東京のパーソナリティーをもつとめる矢ヶ崎さんはブルー系のスーツ。服装でまずうならされ、それぞれの演題は「レイモンドファームのこれまでとこれ

都市農業に吹く新たな風

詳細をご報告することはかなわないが、代表して岩崎さんの話の要点を掲げてみる。

- ・確実に売れる定番商品のみを大量生産。B品は捨てる。
- ・野菜の品種や作型、農薬等の情報はあえて意図的に公開
- ・日曜は完全定休、土曜は午前のみの実質週休1.5日。労働時間は週40時間、月150時間、年1800時間以内
- ・機械のできる作業を増やし、楽することこだわる。e.t.c.
- ・徹底した効率重視・収益重視で、インスタグラムによる情報発信で生産者、消費者とつながる。体験農園等とはまた異なる専業的経営であり、立派な一つの経営・生き方だ。今、多様化する都市農業が面白い。